

# 東建パブリニュース

平成30年2月15日  
経営管理本部 広報IR室

《このニュースは、当社に関連する記事が掲載された新聞・雑誌等の情報を逐次、速報するものです。》

**掲載** 平成30年2月15日 日本経済新聞 P.44

●当社に関する記事の掲載がありましたので、以下の通りご報告いたします。

## 文 化

刀剣や甲冑など、日本の古い武具を収集して40年になる。歴史に思いをはせ、さらには自分の仕事上もこれら収集品に触発されてきた。収集が企業経営と結びついているという点で、私は少し異色のコレクターかもしれない。

武具、とりわけ刀剣への関心がどこから来たのかを考えると、子供のころの記憶にたどり着く。愛知県岡崎市の夫家の仏壇の横に、2枚の写真があった。警察官の制服姿



収集品の一部は筆者が経営する会社の本社（名古屋市）で公開している

る力である。今思えば、くありふれたものだが、初めて手にした日本刀だ。とてもうれしく、興奮したことを覚えている。

以来、少しずつ買い集めていった。収集は因果なもの、それが欲しいという執着心だけで手に入るものでもない。いくら探しても見つからぬものがあり、思いがけ



左右田 稔

た。やがて「五箇伝」と呼ばれる大和、山城、備前、相州、美濃が独自の作風を打ち立て、名工を多く輩出した。江戸時代になるとさらに技法は多様化し、現代刀に至る。私は幅広い年代のものを

集めている。やがて興味は甲冑にも向いた。最初は古物ではなく、現代の甲冑師に往時と同じ技術で新たに作ってもらったことから始めた。だがそれでは飽き足らず、古いものにも手を伸ばすようになった。

「地元ゆかり」に愛着が、日本刀274振り、槍・薙刀35振り、甲冑40領というのが目下のコレクションだ。その一つひとつに思い入れがあるが、やはり地元ゆかりのあるものへの愛着はひとしおだ。

たとえば重要美術品に認定されている「太刀則房」は徳川家康の家臣であった本多忠勝の末裔、忠粛伝来の名刀。忠粛は岡崎藩の初代藩主である。袴も素晴らしく、鞆に施した沃懸地の塗りはきらきらとした光を放って目を奪われる。またこれも本多家伝来の甲冑「鉄鎧地三十二間総覆輪兜金小札緋威二枚胴具足」は木彫に金箔を施した兜が見事で、細部の作

### 刀剣収集経営と交えて

◇人間の命を超えて永続する武具 企業に通底◇

と軍服姿の、いずれも父方の伯父が写ったものだ。太平洋戦争で戦死したこの伯父に私は会ったことはない。

この写真を見上げるたび、伯父が腰に提げた刀に目を奪われた。チャンバラごっこに興じていた少年だったから、本物の刀とはどういふものだろう、と空想していた。

田んぼの真ん中にぼつんと立つその店には看板もなければ窓もなく、物置小屋か何かのようだった。

た。中に入るとずらりと刀があった。店主は老人で、どうぞゆっくり見ていきなさいと言う。

買ったのは素朴な刀と脇差だった。反りがなく軽い「柳生刀」と呼ばれる

れ、当時住んでいた愛知県刈谷市内の刀剣商を訪ねた。

「地元ゆかり」に愛着が、日本刀274振り、槍・薙刀35振り、甲冑40領というのが目下のコレクションだ。その一つひとつに思い入れがあるが、やはり地元ゆかりのあるものへの愛着はひとしおだ。

た。やがて興味は甲冑にも向いた。最初は古物ではなく、現代の甲冑師に往時と同じ技術で新たに作ってもらったことから始めた。だがそれでは飽き足らず、古いものにも手を伸ばすようになった。

た。中に入るとずらりと刀があった。店主は老人で、どうぞゆっくり見ていきなさいと言う。

買ったのは素朴な刀と脇差だった。反りがなく軽い「柳生刀」と呼ばれる

れ、当時住んでいた愛知県刈谷市内の刀剣商を訪ねた。

「地元ゆかり」に愛着が、日本刀274振り、槍・薙刀35振り、甲冑40領というのが目下のコレクションだ。その一つひとつに思い入れがあるが、やはり地元ゆかりのあるものへの愛着はひとしおだ。

た。やがて興味は甲冑にも向いた。最初は古物ではなく、現代の甲冑師に往時と同じ技術で新たに作ってもらったことから始めた。だがそれでは飽き足らず、古いものにも手を伸ばすようになった。

た。やがて興味は甲冑にも向いた。最初は古物ではなく、現代の甲冑師に往時と同じ技術で新たに作ってもらったことから始めた。だがそれでは飽き足らず、古いものにも手を伸ばすようになった。

た。やがて興味は甲冑にも向いた。最初は古物ではなく、現代の甲冑師に往時と同じ技術で新たに作ってもらったことから始めた。だがそれでは飽き足らず、古いものにも手を伸ばすようになった。

た。やがて興味は甲冑にも向いた。最初は古物ではなく、現代の甲冑師に往時と同じ技術で新たに作ってもらったことから始めた。だがそれでは飽き足らず、古いものにも手を伸ばすようになった。

りは見飽きるということがない。長く受け継がれて来た刀剣や甲冑を前にすると、歴史に思いを誘われる。実は若いころは歴史学者に憧れていた。現実の私は経営者になったが、歴史を考えると通底すると思っている。

収集品は預かり物 愛知の人間なので家康への思いは特に強いが、彼は戦に勝ったから偉いのではない。約300年の長い期間続く社会の仕組みを作ったから英雄なのである。人間の命は有限だが、それを超えて永続するものを作ることにできる。刀剣や甲冑もまたそうだろう。そして私の場合、それは企業なのである。

収集品を自分のものと思ったことはない。これは預かり物である。だから多くの人にこれらを見ていただきたいと思いついた。2020年6月に名古屋市内に私設の博物館を設ける。

収集品はすべてそこに寄贈するが、ただ一つ、最初に手に入れた柳生刀だけは手元に置いておこうと思っている。この素朴な一振りは、収集家、そして経営者としての私の原点なのだ。（そうた・みのる「東建コーポレーション社長」）